

■清少納言 歌人、随筆家。「枕草子」の著者として、日本の随筆文化の祖となる。

せいしょうなごん
・ ・ ・ ・ ・ 966＝ この頃、_“梨壺の五人”の一人として有名な歌人清原元輔の末娘に生まれる。母は元輔後妻周防命婦。祖父（曾祖父ともいう）深養父も中古歌仙三十六人に数えられる和歌重代の家柄。

安和の変・ ・ 969＝ 3歳： 軽妙洒脱な父に愛され、また、父の友人の源順・大中臣能宣ら漢詩文や和歌に達者な一流人物に囲まれて、利発で早熟な少女として育つ。

父はまた、地方財政通で、小野宮家の藤原実頼や実資に近侍して、その庇護を受けながら、受領を歴任し、歌の分野でも、道綱母とともに、小野宮家の双璧を成す。

・ ・ ・ ・ ・ 975＝ 9歳：

・ ・ ・ ・ ・ 981＝15歳：小野宮家グループの名家橘氏の嫡男則光と結婚。
・ ・ ・ ・ ・ 982＝16歳：則長を生んだが、
まもなく、なぜか則光と離婚。その後も、則光との親交は続く。

永観荘園整理 984＝18歳：
往生要集・ ・ 985＝19歳：_この頃、藤原信義と再婚したらしく、信義の地位から“清少納言”と呼ばれるようになったと考えられる。
花山天皇出家 986＝20歳：この年、父が肥後守に任じられ、小野宮家所領の管理のためか、高齢(78)にもかかわらず現地に赴任、

藤原定子入内 990＝24歳：そのまま、任地で父が死去。

・ ・ ・ ・ ・ 993＝27歳：*天然痘大流行で夫が死去したためか、一条帝中宮、関白藤原道隆の娘定子に出仕。外向的で協調性に富み、
感激性の清少納言は、華やかな宮廷生活に素直に融け込み、たちまち中宮方を代表する存在となる。

・ ・ ・ ・ ・ 994＝28歳：積善寺供養に前後するころが*最も華やかな時期で、“香炉峰の雪”で評判をとったりしたが、
道長内覧宣旨 995＝29歳：_道隆が薨じると、政界の形勢は一変して中宮の周辺には暗雲が垂れこめ、
花山法皇事件 996＝30歳：_中宮の兄弟伊周・隆家らが左遷されると、中宮の女房たちも去就に迷い、殊寵をほしいままにしていた清少納言には、左大臣道長方に内通しているとのうわさが集中して、長期の里居にこもることとなった。気を紛らせるために原初狭本類纂型の「枕草子」を執筆し始めたと思われる。やがて中宮の愛情にこたえて帰参してからは、叔父道長の圧迫や、道長の娘彰子と二后並び立つ窮境にも屈せず、一条天皇の愛情にこたえる皇后定子の姿に、いっそうの忠誠心を固めて行く。この間、父に縁故のあった親子ほど年上の藤原棟世の後妻として再婚し、小馬命婦を出産。

二后並立・ ・ 1000＝34歳：一時、夫の赴任先摂津に下るか。皇后が死去してからは、その遺児？子内親王の養育に預かり、
枕草子・ ・ ・ 1001＝35歳：_もっぱら皇后定子のすばらしい人柄を筆の限りを尽くして賞賛し、その挽歌たる「枕草子」を書き上げ、
・ ・ ・ ・ ・ 1002＝36歳：この間も、なお遺児らの養育にあたっていたらしく、御所に来訪する藤原行成と度々歓談し、また、_私邸を訪ねてきた源経房が「枕草子」の草稿を見つけて無理に持ち出して、存在が広く知られるようになり、

源氏物語始・ 1008＝42歳：*完結広本雑纂型「枕草子」として完成。

・ ・ ・ ・ ・ 1010＝44歳：この頃には、紫式部と同じ御所に仕えており、火花を散らし、周囲も煽ったらしく、「紫式部日記」には、辛辣な清少納言評があるが、
・ ・ ・ ・ ・ 1011＝45歳：*この頃、3人目の夫棟世も死去したらしく、兄や娘の家などを、転々とした後、

道長太政大臣1017＝51歳：
三后鼎立・ ・ 1018＝52歳：_世間との交渉を避けて、愛宕山中腹月輪寺に近い棟世の月輪山荘に隠棲し、
・ ・ ・ ・ ・ 1020＝54歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1025＝59歳：この頃、_没した。